

父親の子どもへのコミットメントを規定する要因 —Rusbult の投資理論の拡張モデルを専業主婦家庭に用いて—

加藤 邦子
(ジェンダー学際研究専攻)

1. 問題の所在と本研究の目的

父親に関して、初期の研究では、子どもにとっての父親の役割や機能は、母親と対照的に、稼ぎ手、道具的役割を果たす存在と定義され、静止的に捉えられていたが、Parke (1995) が述べているように、家族員は互いに直接的、間接的な影響を及ぼしあっており、家族員は相互依存的であるとされている。つまり、父親の役割は、母親の取る役割に伴って変化するものと捉えられるようになっていく。このような指摘によって、欧米諸国では父親を理解するために、個人、親子、夫婦、などさまざまな側面から検討され、相互作用のパターン、関係性のアセスメントによって、相互作用による子どもへの直接・間接的効果を取り上げ、子どもの発達段階によって父親の機能が異なることが明らかにされている。関係の形成過程や変容に関する研究も積み重ねられている。

日本の子育て事情を考えると、現代の父親は昔の父親と比べると、育児参加の機会は着実に増えている。たとえば、女性の就業率の上昇、立会い出産の増加、育児休業制度・ワークライフバランスの推奨、父親を対象とした育児グループやイベントの開催がひろがっていること、などである。ところが、日本の父親は、国際比較調査によれば(日本女子教育会、1995)、平日に子ども(3歳以下)とかわかる時間は、他国(韓国、タイ、アメリカ、イギリス、スウェーデン)と比較してもっとも少なく、10年後の調査(国立女性教育会館、2006)においても、韓国に次いで少ないことが明らかにされている。とくに父親と母親の子どもに関わる時間の差が大きいことが特徴である。一方、父親の育児遂行の規定要因を問う研究は積み重ねられてきたが、父親を主体的な子育ての担い手として取り上げている研究は、母親研究と比較すると少ないのが現状である。斧出(1993)は、男性にとって育児の積極的意味、つまり育児を男性の情緒充足として位置づける意義について述べており、男性が育児に主体的に関与することと親子の関係

性との関連を実証的に研究することが求められる。また、日本においても、父親の育児参加が子どもにプラスの影響があることは確かめられてきたが、父親のどのような要因が父子関係に影響を及ぼすかについてはあまり明らかになっていない。

とくに専業主婦家庭では、夫婦間の性別役割分業がよりはっきりしていると考えられ、父親は、子どもを妻に任せきりにするなど子どもとの関係性が相対的に弱まる可能性が予想される。したがって、父子関係を築くための要因を検討し、どうしたら父子関係が維持できるかについて検討することには意義があると考えられる。柳原(1995)は、平等化と幸福化への志向という視点から、家族関係においては「男」「女」という固定的なカテゴリーが課す抑圧から解放され、より自由で柔軟なジェンダー関係を再構築すること、近代社会が前提とした効率、支配の論理を修正ないし離脱する必要があるとし、子どもなど弱者への配慮を欠いた平等化は、新たな差別問題、遺棄問題を生じさせ、幸福には結びつかないと述べている。ではどのようにしたら、子どもに配慮した親子の関係性が育めるのであろうか。たとえば、子どもの発達に合わせた養育者の存在について明らかにした Winnicott (1965=1977) によれば、乳児期には時間的、空間的に連続性を保ち、子どもが依存できることが必要だが、幼児期には子どものニーズを読みとりながらも養育者の意図を伝え、子どもが他者の存在を意識するような相互交流が求められるとしている。つまり、子どもの自己主張によって親子間に葛藤が生じる場合、子どもの感情を読み取る必要はあるが、受容するばかりでなく限界を設定するなどの程よい関係性の構築が求められるのである。

したがって、本研究では、以上の問題の所在をもとにして、夫婦間の性別役割分業がよりはっきりしていると考えられる専業主婦家庭の父親に焦点をあてて、多重役割による葛藤を感じるものが少ないと予想される反面、子どもとの関係性が相対的に弱まる可能性が予想されるため、父子関係を築くための要因を捉えることを目的とする。その際、

育児参加度、父親としての充足感、育児にどのくらい価値をおいているかの程度の影響を検討することによって、父親にどのように働きかけたらよいのかについて示唆を得ることが期待される。

2. 先行研究の検討

2. 1. 父子の関係性をめぐる研究

国際比較調査（国立女性教育会館, 2006）によると、父親が母親より子どもに関わっている領域は、「子どもと一緒に遊ぶ」であることは明らかにされている。育児参加度と親子関係のあり方との関連を分析した研究は、家族生活についての全国調査（NFRJ98）のデータを用い、同伴行動の頻度との関連をみたもの（藤本, 2001）、親が関係良好と捉える程度（賀茂, 2001）を従属変数としてその規定要因について明らかにした研究などであるが、あまり多く取り組まれてこなかった。父親から子どもへの具体的な養育行動の分析をおこなった研究については、Clarke-Stewart（1980=1986）は、家庭場面の観察において、行動の出現頻度、親の情緒的表出性の評定（行動の受容、身体的・物質的・社会的・言語的刺激、応答性、なだめる、励ますこと）を用いて、親子関係を15ヶ月から縦断的に研究した。その結果、遊びにおける行動頻度は母親の方が父親より多く、遊びのスタイルには母親はモノを使う遊び、父親は社会的で身体を使う遊びが多いという違いが見られたとする。Snarey, Son, Kuehne, Hauser, & Vaillant（1987）は、Eriksonのライフサイクル論から成人期の発達課題であるgenerativityという概念をとりいれて、父親と子どもの相互作用を養育性の視点から検討している。その後、Dollahite, Hawkins & Brotherson（1997）、Hawkins, Christiansen, Sargent, & Hill（1993）は、父親について、家族の中の存在感、子どもとの相互作用における男性の独自性は、広い意味での養育として経験されると指摘している。

このように父子関係に関する従来の研究によると、養育には、やりとり、コミュニケーション、情緒的表出という行動・感情の指標が広く含まれており、父親と子どもの相互作用についてもかなり幅広く含まれるようになっている。

一方、社会的交換理論の立場では、個人が関係を継続させるための概念としてコミットメント（Becker, 1960）が用いられる¹。Cook & Emerson（1978）はコミットメントを合理的判断に基づく関係性の維持と捉え、権力との関連について論じている。最近の研究（Knoester & Petts, 2007； van Dam Karen, 2005 など）では、対象間の資源のやりとりに関して報酬とコストの両面から分析するもの

の、対象への自己投入や情緒的側面についても言及される場合に、コミットメントを用いて説明されることが多い。Adams & Jones（1999）は、行為者がコストを受け入れた上で、対象に忠実であろうとするような関係が形成され、対象以外の選択を断念したり、見合わせたりすると説明している。Rusbult（1980; 1983）はこのコミットメントについて、人がある対象への関係を維持し、かつ関係に愛着を感じる傾向と定義し、資源の投入量、充足感、関係への価値づけが影響を及ぼしているとしている。理論的に当該関係に資源を投資するほど、コミットメントが高まると説明するので、投資理論と呼ばれる。対人間のやりとりは、当事者の主観や価値づけによって意味が付与され、充足感を感じる場合に繰り返され、個人が外から強制された行為はコミットメントを高めないが、選択し責任をもつ行為はコミットメントを高め、関係維持の要因になるとし、理論がさまざまな人間関係に適用される可能性を示唆している。実際に投資理論は、これまでは恋愛関係に適用されることが多かったが、婚姻関係（Impett et al., 2001）、友人関係（中村, 1990）、夫によるドメスティックバイオレンス（Rusbult & Martz, 1995, Rhatigan & Axsom, 2006）、仕事への関与（van Dam, Karen, 2005; Koslowsky, 2001; Farrell & Rusbult, 1981）にも適用されるようになり、対象の幅を拡張している。さらに加藤（2007）は父母を対象とし、子どもへのコミットメントを規定する要因分析を行い、①育児参加度、②ディストレス、③育児の価値づけ、について投資理論の適用可能性を検討している。これによれば子どもへのコミットメントは育児参加度が多いほど、ディストレスが低いほど、育児以外の価値づけが低いほど強まることが明らかになった。また、妻が就業しているほど、父親の子どもへのコミットメントの程度が強まることも確認されている。Rusbultは、コミットメントを1因子で捉える立場をとっているが、コミットメントを構造的（3因子あるいは2因子）に捉える立場（Johnson et al., 1999; van Dam, Karen, 2005; Stanley & Markman, 1992）もあり、Brotherson & Dollahite（1997）は、父親のコミットメントについてインタビューによる質的分析を行い、父親が子どもの興味に気づくこと、一緒に活動する中で子どもに個人的に関与すること、子どものニーズに合わせて相互作用することという概念を導き出した。

一方心理学では、親子関係について愛着理論（Bowlby, 1969=1976; 1973=1977; 1980=1981; Ainsworth et al., 1978）を用いて解釈されることが多い。養育者に対する子どもの愛着行動と、養育者の保護行動の提供が情緒的な絆を形成し、その後の子どもの情緒安定性との間に関連をもつとする立場で、子どもは対人関係における情緒の絆を、主に親子関係を基盤にして発達させると考える（近藤,

2001)。このような親への愛着行動は、子どもだけでなく、親がどのように子どものシグナルを察知し、適切に応じられるかどうかと当然関わっている。これまで Ainsworth et al. (1978) は敏感性 (Maternal Sensitivity)、Emde (1980) や Biringen & Robinson (1991:258-271) は情緒的応答性などの概念を用いて検討してきた。

このように親子関係は、社会学においても心理学においても検討されてきたが、近年におけるジェンダー関係の柔軟化などを通じ、親であることの意味づけが変化していることを考え併せると、最近の親がどう子どもとの関係を形成し維持するかを検討してみることに十分な意義があると考えられる。また Giddens (1992=1995) は、家族をめぐる親密性について、親子がともに相手を可能な限り平等な存在として遇することができるように、親子間の相互行為において互いの立場を再吟味していくことが必要であると指摘し、まさに関係性の質、双方に相手に対する神経の細やかさと思いやりが求められていると述べている。

2. 2. 育児参加度をめぐる研究

社会学では1990年代以降、親の育児参加度(この論文では育児量を育児参加度とする)を促進する要因について、相対的資源差、時間的制約、社会規範、育児ニーズ、夫婦の情緒関係、環境的制約がとりあげられ検討されてきた(永井, 2004)。

従来、父親の育児参加度は妻の就業の有無によって影響を受けるという研究は多い。Rallings & Nye (1979) によるレビューでは、妻が就業に費やす時間の長さが、伝統的な女性の役割を夫が担うことに正の影響を与え、夫の方が権力をもつことには負の影響を与えることを明らかにしている。また Ross (1987) などの研究によれば、相対的資源差の要因(夫と妻の相対的資源差によって家庭における労働配分に影響があるとすると)は支持されている。つまり、夫と妻の権力をその社会経済的資源(収入や教育、職業など)によってダイナミックに捉え、夫婦の資源差が大きいほど育児には不平等が生じると考えるので、専業主婦家庭では夫の育児参加度が少なくなるとする。時間的制約要因においては、勤務時間が長い夫は育児参加度が少ないこと、社会規範要因は、とくに日本においては夫婦間の性別役割分業が強く、そのような規範によって、育児参加度が規定されていること、育児ニーズ要因は、きょうだい数が多く、子どもがより年少である程、母親以外の手助けが必要になるために夫の育児参加度が多くなることが示されている。Ishii-Kuntz et al. (2004) は、育児参加度を促進する要因について、相対的資源差、時間的制約、社会規範、育児ニーズ要因を仮定したモデルを作成し、実際に日本の夫婦に適合するか検討しているが、父親の勤務時間の短さ、母親の

就業、育児ニーズの高さが、父親の育児参加度を高める要因であることが明らかになったとしている。

3. 相対的資源差・時間的制約要因と投資理論を組み合わせた分析モデルと仮説

本研究では、先行研究から導かれる課題として、父親がどのように子どもとの関係性を高めるかについて、Rusbult の投資理論で用いられる概念間の枠組みを応用して検討することが必要であると考えた。理論枠組みは、父親の育児への資源の投入が多いほど、育児に価値を置くほど、育児に充実感をもつほど、コミットメント(関係関与性)が高くなるとした。育児参加度が多い場合であっても、他の選択肢が相対的に魅力的である場合には、子どもとの関係から低い充足感しか得ることができず、子どもとの関係性を保つことがより困難になると考えられ、反面、他の選択肢の価値が低い場合には、育児により魅力を感じ、関係を維持するために子どもとの関係性が高まると考えるのである。相対的価値づけの概念を用いているために、現代の育児の意味づけを捉える際に有効なモデルであると考えられるからである。

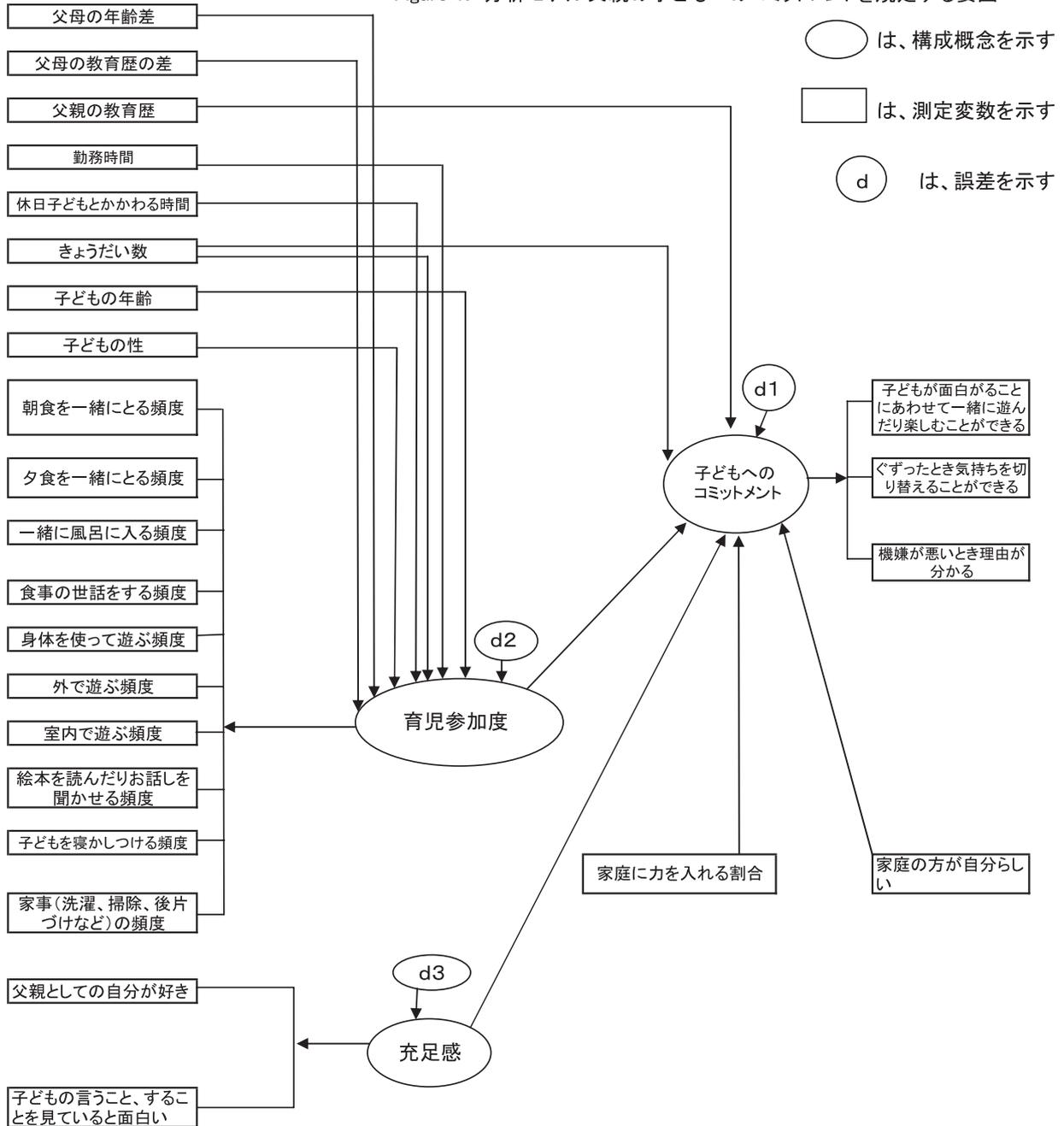
さらに、育児参加度をめぐる従来の研究から、専業主婦家庭の父親を対象とし、子どもへのコミットメントを従属変数に、コントロール変数として、父親の教育歴、きょうだい数を仮定し、父親の育児参加度に対するコントロール変数として、相対的資源差(夫婦の年齢差、教育歴の差)、時間的制約要因(勤務時間、休日子どもと接する時間)、育児ニーズ要因(子どもの数、年齢、性別)が影響を与えるものと仮定した(Figure 1)。

この分析モデルでは育児参加度、充足感、子どもへのコミットメントをいくつかの項目から成る構成概念と見なし、専業主婦家庭の父親の子どもへのコミットメントに及ぼす影響に関する仮説を提示し、実際のデータに適用できるかどうかを検討する。

3. 1. 子どもへのコミットメント

本研究では、Brotherson ら (1997) の分析を参考に、「子どもが面白いことに合わせて一緒に楽しむことができる」、「子どもがぐずったとき、気持ちを切り換えることができる」、「子どもの機嫌が悪い時、その理由が分かる」という子どもとの相互作用における父親のコミットメントを示す3項目で捉えることにした。というのも本研究が対象とする2歳児では、自己が明確になり、自己主張が活発になって、家庭では親がその対応に困難を感じる時期であることから、関係が不安定になると予想され、子どもへのコミットメントは、子どもの興味や機嫌の悪さに親が気づい

Figure 1. 分析モデル父親の子どもへのコミットメントを規定する要因



たり、共感すること、子どものニーズに合わせて対応することを含み、先述した親の程よい対応 (Winnicott, 1965=1977) として捉えることができると考えられるからである。

3. 2. 育児参加度

本研究では、身体を使った遊び、外遊び、室内遊び、絵本を読んだり話をする、1週間のうち一緒に朝食・夕食をとる頻度、食事の世話、風呂に入れる、家事（洗濯、掃除、後片付けなど）、寝かしつけの頻度を尋ね、より多様な側面から成る構成概念（育児参加度）を用いた。さらに育児

参加度には、相対的資源差として、夫婦の年齢差、教育歴の差の要因、時間的制約要因として、勤務時間、休日に子どもと接する時間、育児ニーズ要因はきょうだい数、子どもの年齢、子どもの性別が影響を及ぼすとした。

3. 3. 父親としての充足感

父親が親子関係から得る充足感について、父親役割の選好の程度、関係を楽しめるかどうかの2項目によって構成される概念とした。

3. 4. 仕事と家庭のどちらに価値づけをおくか

選択的価値づけを厳密に捉えようとする、調査対象ごとにさまざまな比較対象が想定され、定義づけが難しくなる。このため本研究では、操作的に仕事と家庭（家族、育児）という2つの領域に限定し、仕事と家庭を相対化した時の家庭の価値づけとした。つまり、「家庭と仕事のそれぞれに気持ちの上でどれくらい力を入れているか」を尋ね、全体を10とした場合の家庭の比率と、「仕事をしている時よりも、家族と過ごしている時に自分らしさを感じる」の回答によって求め（独立変数）、値が大きいほど仕事よりも家庭生活を価値づけていると解釈した。

3. 5. コントロール変数

加藤（2007）の結果を参考に、父親の教育歴、きょうだい数を、子どもへのコミットメントに影響を及ぼすコントロール変数として分析モデルに組み入れた。また夫婦の年齢差、教育歴の差、勤務時間、休日に子どもと接する時間、きょうだい数、子どもの年齢、子どもの性別は、育児参加度に対するコントロール変数とした。

3. 6. 分析モデルにおける仮説

子どもへのコミットメントについて、以下の仮説を設定した。

- ①育児参加度が多いほど、子どもへのコミットメントは高まる。
- ②仕事と家庭の価値づけにおいて、家庭の価値づけが高いほど、さらに「仕事をしている時よりも、家族と過ごしている時に自分らしさを感じる」と回答しているほど、子どもへのコミットメントは高まる。
- ③父親としての充足感が高いほど、子どもへのコミットメントは高まる。
- ④父母の年齢差、教育歴差が小さく、時間的制約が小さく、育児ニーズが高いほど、父親の育児参加度は多くなる。父親の教育歴が高くなるほど、きょうだい数が少ないほど、子どもへのコミットメントは高くなる。

4. 方法

4. 1. 調査協力者：横浜市内にある親子教室に2003～07年の毎年4月から1年間通所した2歳児とその親333組である（1年間4クラス開催し、各クラス約20組の2歳児とその母親が週1回のペースで通うクローズドグループ）。平常は母子が通い、親子遊び、親のための懇談会やテーマに基づいた学習、子どもの自由遊びの時間を設けているが、父親を対象とした調査への協力者を募った。

4. 2. 協力者の特性：2歳児をもつ父親であるが、父親の

平均年齢は37.16歳（27歳～52歳）、母親は34.89歳（25歳～47歳）。子どもの性別は男児48.4%、女児51.6%で、4月時点の平均年齢は、2歳6ヶ月である。子どものきょうだい数の平均は1.58人（1人～4人）。教育歴については父親の79.8%、母親の36.8%が4年制大学を卒業しており、母親の49.6%が短期大学出身者である。全国調査（総務庁、1999）と比較して相対的に高学歴を示していた。父親の95.0%の仕事は企業に雇用される勤め人であり、母親はすべて専業主婦である。

4. 3. 調査手続きと内容：父親への質問紙は、母親を介して配布し、記入後、回収したが、回収率は82.3%である。

4. 4. 分析方法

投資理論を子どもとの関係性に適用するために、分析モデルに実際のデータをあてはめ、共分散構造分析を行った²。この分析方法では、構成概念に対する各変数の因子負荷量の推定値が求められるために、項目としての妥当性、分析モデルにおいて設定した構成概念間の因果関係について検討し、仮説に沿って分析モデルの適合度を求めることができる。

5. 結果

5. 1. 分析に用いた変数の値

平均値・標準偏差をTable 1.に示す。一週間のうち子どもと一緒に朝食・夕食をとる頻度は、いずれも2～3回の回答が多い。また、育児は、風呂に入れる、身体を使う遊び、室内遊びの頻度が相対的に多かったが、週1、2回という回答で、休日に子どもにかかわることが多いのではないかと考えられる。一方、食事の世話や家事は、月1、2回とした回答が多く、相対的にかわり方が少ない。充足感は2項目とも高い値を示した。家庭に相対的に力を入れる比率の平均値は、4.72を示し、やや仕事重視の傾向はあるものの、家族といるときに自分らしさを感じる（範囲1点～4点で平均値が2.925）とする父親が多いようである。子どもへのコミットメントは3項目とも4段階評定で2.5よりも高い値を示していた。

5. 2. 分析モデルの検討

子どもへのコミットメントを従属変数とした分析モデルに対し、AMOSによる共分散構造分析を行った。Figure 2.に分析結果と標準化された解を示す。子どもへのコミットメント（構成概念）を規定する要因としては、育児参加度、充足感、家庭に力を入れる比率、家庭の方が自分らしい、が統計的な有意性を示した。つまり、対象とした専業

Table 1. 用いた変数の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
父親の年齢 (歳)	37.160	4.233
母親の年齢 (歳)	34.890	3.490
父母の年齢差 (+ 8) *注 1.	10.262	3.519
父親の教育歴 *注 2.	3.785	0.689
母親の教育歴	3.248	0.635
父母の教育歴差 (+ 3) *注 3.	3.538	0.741
勤務時間 (時間)	10.671	2.214
休日の子どもとかかわる時間 (時間)	7.407	3.312
きょうだい数 (人)	1.580	0.644
子どもの年齢 (歳)	2.060	0.060
子どもの性別	1.520	0.500
一緒に朝食をとる頻度*注 4	2.321	1.050
一緒に夕食をとる頻度	2.157	0.702
風呂に入れる頻度*注 5	3.171	0.792
食事の世話をする頻度*注 5	2.662	0.935
身体を使って遊ぶ頻度*注 5	3.148	0.745
外で子どもと遊ぶ頻度*注 5	2.726	0.595
室内で子どもと遊ぶ頻度*注 5	3.106	0.763
絵本やお話しをする頻度*注 5	2.670	0.878
寝かしつける頻度*注 5	2.333	1.103
家事の頻度*注 5	2.510	1.048
父親としての自分が好き*注 6	3.168	0.777
子どもの言うことすることは面白い*注 6	3.795	0.411
家庭に力を入れる比率*注 7	4.720	1.480
家族といるときに自分らしい*注 6	2.925	0.687
子どもが面白いことに合わせて一緒に楽しむ*注 6	3.313	0.631
ぐずったとき気持ちを切り換えることができる*注 6	2.697	0.717
機嫌が悪いとき理由が分かる*注 6	2.794	0.683

メ
ヘ
の
コ
ミ
ツ
ト
父
親
の
子
ど
も

注 1. 母の年齢が父より高い場合、マイナス値になるので8を加えて調整してある

注 2. 教育歴は中学卒業1、高校卒業2、専門学校・短大卒業3、大学卒業4、大学院卒業5

注 3. 母の教育歴が父より高い場合、マイナス値になるので3を加えて調整してある

注 4. 週のうち6~7回:4、4~5回:3、2~3回:2、それ以下:1

注 5. 毎日する:5、週に2、3回する:4、週に1、2回する:3、月に1、2回する:2、全くしない:1

注 6. あてはまる:4、ややあてはまる:3、ややあてはまらない:2、全くちがう:1

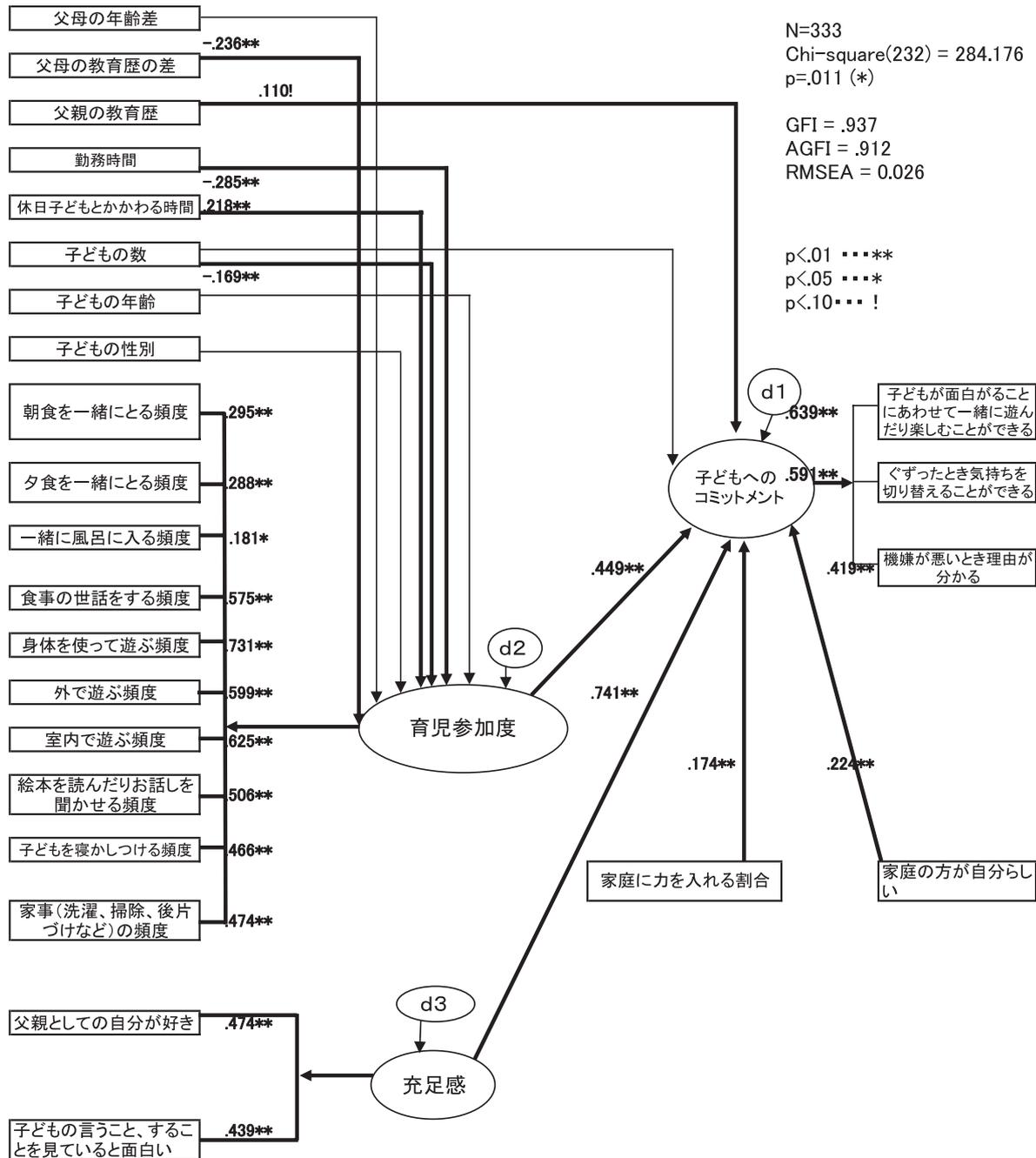
注 7. 家庭と仕事を10として気持ちの上で家庭に力を入れている比率

主婦家庭における父親については、育児参加度が多いこと、充足感が高いこと、また家庭に力を入れる比率が高く、家族といるときに自分らしさを感じるとするほど、父親の子どもへのコミットメントが高まることが示された。その際、父親の育児参加度に影響を与える要因として、父母の相対的資源差としての教育歴の差、時間的制約としての勤務時間・休日子どもとかかわる時間、育児ニーズとしてのきょうだい数の4つの項目の有意性が認められた。つまり、父母の相対的教育的差(父の教育歴マイナス母の教育歴の値)

が小さいほど、父親の時間的制約が少ないほど、きょうだい数が少ないほど、父親の育児参加度は多くなる。これによって投資理論を拡張した分析モデルの有効性が示された。

分析モデルの各構成概念が因子として各項目と適切に対応しているかを示す値については、子どもへのコミットメントとして用いた3項目は、有意水準1%以下の値を示し適切に対応していると考えられる。また、育児参加度と対応する10項目、充足感と対応する2項目はほとんど有意

Figure 2. 父親の子どもへのコミットメントを規定する要因: 分析結果 (Amosによる共分散構造分析)



水準 1% 以下の値を示し (1 項目のみ 5% 以下の値を示した)、適切に対応していると考えられる。設定した分析モデルが実際の標本共分散行列と適合しているかを示す指標として、 χ^2 検定を用いたが、 $\chi^2 (232) = 284.176, p = .011$ で有意水準 5% 以下であったが、モデルの適合度が 1 に近いほど良好とされる GFI (Goodness-of-fit-index) 指標を用いると、.937 を示し、これを変数の自由度で調整した AGFI (Adjusted-Goodness-of-fit-index) の値も .912 であり、また、はずれの度合いを示す RMSEA (Root mean square error of approximation) も .026 と基準値の 0.05 よりはるかに小さい。したがって、ここで設定した、投資理論を拡

張したモデルの適合度は高く、データの共分散行列を十分に説明しうるといえる。

6. 考察

どうしたら専業主婦家庭における父親の子どもへのコミットメントを高められるか。その要因を検討するために、投資理論に育児参加度を規定する要因を組み込んだ拡張モデルを作成し、データによる検証を行った結果、仮説にそった構成概念間の因果関係が、支持された。

この分析モデルの特徴の一つは、父親の子どもへのコ

ミットメントの指標として、Brothersonら(1997)の質的分析の結果を取り入れ、「子どもが面白いことに合わせて一緒に楽しむことができる」、「子どもがぐずったとき、気持ちを切り換えることができる」、「子どもの機嫌が悪い時、その理由が分かる」など、父親が子どもの興味・関心ばかりでなく、ネガティブな感情表出(機嫌の悪さ、ぐずりなど)に対してもかかわり、関係を形成していけるような項目を用いたことにある。本研究の調査対象者である2歳児をもつ父親の場合、子どもが、発達に伴う自己主張としてネガティブな感情を親に向けてくることもあり、それとどうつきあうか親として試される時期でもある。したがって本研究における子どもへのコミットメントが、この3項目で構成されることの有効性を示せた上に、育児参加度、充足感、育児の価値づけに規定され、有意な影響があることを明らかにできたことには意義があると考えられる。つまり、子どもが2歳時期の父子の関係性に関して、コミットメント概念をあてはめた場合、相互交流によって調整しあうような関係性の側面を表す項目から構成されるとした場合でも、分析モデルが支持されることが示されたのである。

専業主婦家庭における父親を対象として、ペアレンティングについて討論しあう場の提供など、子育て支援における実践を想定した場合、このモデルで設定したように、父親の育児参加度と父子の関係性との関連についてディスカッションを深めることも、十分可能であるし、また親子の関係性について各項目の妥当性を確認することの有効性(実践的な意味での概念の操作性)も高いのではないかと考えられる。つまり、父親の中でも夫婦の相対的資源差が大きく時間的制約も大きいと想定される、専業主婦家庭における父親の場合でも、育児参加度、父親としての充足感、仕事と家庭のバランスに配慮すれば、子どもへの関係性としてのコミットメントが高められることが確認されたのである。投資理論を、専業主婦家庭における父子関係に拡張して適用する可能性が示された意義はあると考えられる。

つまり、父親が子どもへのコミットメントを高めるために、育児参加度が多いことも重要だが、父親としての充足感や、仕事と家庭の位置づけ(要するにどのような価値づけを設定するか)などの、心理的な側面や価値観などをどのように高めるかについて検討することが必要であり、父親のペアレンティング行動を促進する上で、この点を工夫していくことが必要であることも示された。

一方、父親が子どもへのコミットメントを高めるためには、育児参加度を高く維持できる状況にあること、仕事よりも家庭へ力を入れることが可能であることが重要であることが示された。つまり、職場環境の整備や上司の理解、勤務体制を見直す必要が示唆され、職場における子育て支

援施策を整備し拡張することが求められるのである(Ishii,2003)。さらに育児参加度には、父母の教育歴のちがいが小さいか、あるいは母親の教育歴の方が父親よりも高いことが影響しており、父親の子どもへのコミットメントには教育水準などにおける格差など夫婦の相対的資源差や権力関係が影響を及ぼしている可能性も考えられるのである。父親としての充足感、仕事と家庭のバランスをとるためには、社会や職場の理解や施策を活用することが必要であり、子どもへのコミットメントにも影響を及ぼすことについて、社会全体が理解を進める必要がある。

本研究の限界は、専業主婦家庭における父親のみを対象として示された結果という点である。したがって今後の課題として、調査対象を共働き家庭における父親に拡張して検証しなければならない。家庭の多様化に伴って、ますます複雑な役割を使い分けて生活している親たちが多くなってきているが、子どもへのコミットメントを高めることは、子どもの健全育成のためにも必要なことであると考えられる。したがって、本研究において理論的仮説の下に子どもへのコミットメントについて検討した意義は大きいと考えられる。

(注)

- 1 従来コミットメントは社会心理学で取り上げられてきた概念である。たとえば意思決定、集団における逸脱や同調の程度に焦点をあて、認知的不協和および態度-行動パラダイム研究で提示されてきた。最近ではアイデンティティ理論の中でも概念として取り上げられる。Goffman(1961=1985)によれば、役割とselfの間には役割距離が生じており、それは相互行為の中で表現されるが、この役割距離の中に愛着・受け入れ・コミットメントの3つの概念が含まれるとする。個人がいかに多重役割をうまく処理し、役割葛藤を回避しているかについて説明するために用いられる概念のひとつである。このように対人関係に関して用いられる。パーソナルな側面・構造的側面・規範的側面など多面的に捉えられる立場、愛着や関係の維持にかかわり一元的に捉える立場がある。今後、親密な関係におけるコミットメントが、どのような思考、感情および行動の特徴をもつかについて明らかにする必要があるとされている。
- 2 共分散構造分析は因子分析のように観測変数の背後にある因子を「内生変数」として扱える一方、重回帰分析と同じように、観測変数間の原因結果関係を評価するという特徴をもつが、その検証はあくまで予め仮定したモデルの範囲内で行われる。したがって、分析結果は、そのモデルが現実(与えられたデータ)に合致しているかどうかを示すものである(他にもっとよいモデルが可能性は否定できない)という制約がある。しかし共分散構造分析を使用することで、任意のモデルを容易に組み立て検証でき、非常に効率的な分析ツールである。

(文献)

Ainsworth,M.D.S.,Blehar,M.C. Waters,E.,& Wall,S.,1978, *Patterns*

- of attachment: A Psychological study of the strange Situation. Hillsdale,NJ: Erlbaum.
- Adams,J.M. & Jones,W.H.,1999,“Interpersonal Commitment in Historical Perspective.” In Adams and Jones(Eds.), *Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*. New York : Kluwer Academic / Plenum Publishers.
- Becker,H.S.,1960, “Notes on the concept of commitment”, *American Sociological Review*,66 :32-40.
- Biringen,Z. & Robinson,J.,1991, “Emotional Availability in mother-child interactions: A Reconceptualization for research”,*American Journal of Orthopsychiatric Association*,Vol.61,No.2,258-271.
- Bowlby,E.J.M., 1969,*Attachment and Loss, Vol.1.Attachment*, London:The Hogarth Press. (黒田実郎他訳. 1976,『母子関係の理論Ⅰ. 愛着行動』. 岩崎学術出版社.)
- 1973,*Attachment and Loss,Vol.2, Separation: anxiety and Anger*, London:The Hogarth Press. (黒田実郎他訳. 1977,『母子関係の理論Ⅱ. 分離不安』. 岩崎学術出版社.)
- 1980,*Attachment and Loss, Vol.3. Loss: Sadness and depression*, London:The Hogarth Press. (黒田実郎他訳. 1981,『母子関係の理論Ⅲ. 対象喪失』. 岩崎学術出版社.)
- Brotherson,S.E. & Dollahite,D.C., 1997, “Generative ingenuity in fatherwork with young children with special needs”, in Hawkins,A.J. & Dollahite,D.C.(eds.), “*Generative Fathering: beyond deficit perspectives*”, C.A.: Sage.
- Clark-Stewart,K.A.,1980,The father's Contribution to children's cognitive and social development early childhood. In Pedersen,F.(ed.) *The father-infant relationship*,New York: Praeger.
- Cook, K.S & Emerson,R.M., 1978, “Power, Equity and Commitment in Exchange Network”, *American Sociological Review*,43: 721-739.
- Dollahite,D.C.,Hawkins,A.J.,& Brotherson,S.E.,1997,Fatherwork:A Conceptual Ethic of Fathering as Generative Work,inHawkins,A.J.& Dollahite,D.C.(eds.),1997,*Generative Fathering-Beyond Deficit Perspectives*,Thousand Oaks,C.A.: Sage.
- Emde,R.N., 1980, “Emotional Availability : A reciprocal reward system for infants and parents with implications for prevention of psycho-social disorders”, In Taylor,P.N. (ed.) *Parent-Infant relationships*, N.Y.: Grune Stratton.
- Farrell,D & Rusbult, C.E., 1981, “Exchange Variables as predictors of job satisfaction, job commitment, and turnover: the impact of rewards, costs, alternatives, and investments” *Organizational behavior and human performance*. 27, 28:78-95.
- 藤本哲史, 2001, 「働く親の就労特徴と子どもとの同伴行動」. 渡辺秀樹編. 『現代日本の親子関係』(家族生活についての全国調査(NFRJ98)報告書 No. 2-2). 51-62. 日本家族社会学会・全国家族調査(NFR)研究会
- Giddens,A, 1992, *The transformation of Intimacy : Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. (松尾精文・松川昭子訳, 1995, 『親密性の変容-近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』, 東京: 而立書房.)
- Goffman,E. 1961.*Two studies in the sociology of interaction*. N.Y.: The Bobbs-Merrill, (佐藤毅・折橋徹彦訳, 1985, 『出会い: 相互行為の社会学』, 東京: 誠信書房.)
- Hawkins,A.J.,Christiansen,S.L.,Sargent,K.P.,& Hill,E. J.,1993,Rethinking Fathers' Involvement in Child Care:A Developmental Perspective, *Journal of Family Issues*,Vol.14,No.4:531-549.
- Impett,E.A., Beals,K.P.& Peplau,L.A.,2001,“Testing the investment model of relationship commitment and stability in a longitudinal study of married couples.”*Current Psychology*,Vol.20,Issue4,312-327.
- Ishii-Kunitz,M.,2003, “Balancing Fatherhood and work: emergence of diverse masculinities in contemporary Japan”. In Roberson, J.E., & Suzuki, N. (eds.) *Men and Masculinities in Contemporary Japan- Dislocating the salaryman doxa*. NY: RoutledgeCurzon.: 198-216.
- Ishii-Kuntz,M., Makino,K., Kato,K., & Tsuchiya,M.,2004, “Japanese Fathers of Preschoolers and Their Involvement in Child Care”. *Journal of Marriage and the Family*,Vol.66, :779-791.
- Johnson,M.P., Caughlin,J.P. & Huston,T.L., 1999, “The Tripartite Nature of Marital Commitment:Personal, Moral, and Structural Reasons to Stay Married”. *Journal of Marriage and the Family*.Vol. 61.:160-177.
- 賀茂義則, 2001, “Determinants of the Quality of Psychological Relationship between Parents and Children in Japan”, 渡辺秀樹編. 2001, 『現代日本の親子関係 (家族生活についての全国調査(NFRJ98)報告書 No. 2-2)』, :135-148. 日本家族社会学会・全国家族調査(NFR)研究会
- 加藤邦子, 2007, 「父親, 母親が子どもへのコミットメントを維持する要因」. 『家族社会学研究』, 第19巻(2):7-19.
- Knoester,C. Petts, R.J., & Eggebeen,D.J.,2007, “Commitments to Fathering and the well-being and Social Participation of New, Disadvantaged Fathers”, *Journal of Marriage and the Family*,Vol.69.:991-1004.
- 国立女性教育会館, 2006. 『平成16年度・17年度 家庭教育に関する国際比較調査報告書』.
- 近藤清美, 2001, 「きずなの発達」, 米谷淳・米澤好史編著, 『行動科学への招待』,92-105., 福村出版.
- Koslowksy, M., 2001, “Career Commitment as a Predictor of Behavioral Outcomes”, *The Journal of Social Psychology*,Vol. 127,Issue 5:435-444.
- 永井暁子, 2004, 「男性の育児参加」, 『現代家族の構造と変容: 全国家族調査(NFRJ98)による計量分析』, 渡辺秀樹, 稲葉昭英, 嶋崎尚子編, :190-200. 東京大学出版会
- 中村雅彦, 1990, 「大学生の友人関係の発展過程に関する研究- 関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討-」. 『社会心理学研究』, Vol.5,No.1, : 29-41.
- 日本女子社会教育会, 1995, 『家庭教育に関する国際比較調査報告書-子どもと家庭生活についての調査』. 日本女子社会教育会.
- 斧出節子, 1993, 「男性にとっての子育ての意味-子どもを持つ男性を対象とする調査より」. 『家族関係学』. No.12. :1-11. 家族関係学部会.
- Parke,R.D.,1995, Fathers and Families. In Bornstein,M.H. (ed.), *Handbook of Parenting*. Vol.3., Laurence Erlbaum Associates. 27-63.
- Rhatigan,D.L.,& Axsom,D.K., 2006, “Using the Investment Model

- to Understand Battered Women's Commitment to Abusive Relationships". *Journal of family violence*, 21,:153-162.
- Rallings,E.M. & Nye,F.I.,1979, "Wife-mother employment, family, and society", Burr,W.R., Hill,R. Nye,F.I. & Reiss,I.L. (eds.), *Contemporary theories about the family, Vol.1*, The Free Press,:203-226.
- Ross,C.E.,1987,"The division of labor at Home", *Social Forces*,Vol.65(3):816-833
- Rusbult,C. E.,1980, "Commitment and satisfaction in romantic associations:A Test of the Investment Model." *Journal of Experimental Social Psychology*,Vol.16,:172-186.
- Rusbult,C. E.,1983, "A Longitudinal Test of the Investment Model: The development (and Deterioration) of Satisfaction and Commitment in Heterosexual Involvements.", *Journal of Personality and Social Psychology*,45(1):101-117.
- Rusbult,C.E. & Martz,J.M., 1995, "Remaining in an abusive relationship: an investment model analysis of nonvoluntary dependence". *Personality and Social psychology Bulletin*, 21,: 558-571.
- Rusbult,C.E. and Farrell,D., 1983, "A Longitudinal Test of the Investment Model: the Impact on Job Satisfaction, Job Commitment, and Turnover of Variations in Rewards, Costs, Alternatives, and Investments", *Journal of applied psychology*, Vol68,No.3, :429-238.
- Snarey,J.,Son,L.,Kuehne,V.,Hauser,S.,& Vaillant,G.,1987,The role of parenting in men's Psychosocial development:A longitudinal study of early adulthood infertility and midlife generativity, *Developmental Psychology*,Vol.23:593-603
- 総務庁統計局, 1999, 日本統計年鑑第 48 回, 平成 11 年版
- Stanley, S.M., & Markman, H.J.,1992,"Assessing Commitment in Personal Relationships", *Journal of Marriage and the Family*,Vol.54.: 595-608.
- van Dam, Karen,2005, "Employee attitudes toward job changes: An application and extension of Rusbult and Farrell's investment model", *Journal of Occupational & Organizational Psychology*, Vol. 78, Issue 2, :253-272.
- 柳原佳子, 1995, ジェンダーと権力構造, 『家族社会学研究』, No.7, : 23-32.
- Winnicott,D.W.,1965,*The maturational Processes and the Facilitating Environment*, London; 牛島定信 訳, 1977, 『情緒発達の精神分析理論』, 東京 : 岩崎学術出版.

Factors Predicting Fathers' Commitment to Their Two-Year-Old Children : Extention of Rusbult's Investment Model in Homemakers' Households

Kuniko KATO
(Interdisciplinary Gender Studies)

This research examined how fathers' investments in work and child-rearing, their satisfaction with fathering roles and comparison level for alternatives influence fathers' commitment to their two-year-old children in homemakers' family. Rusbult(1980, 1983) defined commitment as "the tendency to maintain a relationship with and feel psychologically attached to someone." Fathers' commitment to their children means that an individual's commitment to maintain a relationship is predicted by a combination of factors such as the person's satisfaction with the relationship, how much the individual has invested in the relationships, and how much individuals value the relationships. This study applied and extended Rusbult's investment model to predict fathers' commitment to their children. Three hundreds and thirty-three employed fathers completed questionnaires about work and family, satisfaction with fatherhood, and the father-child relationships. The analyses were conducted using Structure Equation Model Analysis. The extended model for fathers yielded $\chi^2=284.176$, $df=232$ ($p<.05$). The GFI of 0.937 shows that my hypothesized model fits the data reasonably well. As Figure2 shows, fathers' time availability, educational level gap between father and mother, and number of children significantly affected fathers' investment in child-rearing, and fathers' investment in child-rearing, satisfaction with fatherhood, and placing much value on fatherhood significantly predicted paternal commitment to children. However, the number of children and fathers' educational level had little association with fathers' commitment to children. I found that (1) paternal investment was significantly positive predictor of fathers' commitment to their children; (2) fathers' satisfaction with fatherhood was a positive predictor of their commitment to their children; and (3) a high commitment to their children was predicted by placing much value on fatherhood. These findings suggest that the extended model can contribute to better understand work and family balance of fathers in homemakers' households. This study contributes to the understanding of how fathers' investment in child-rearing, satisfaction with fatherhood, and placing much value on father-child relationship influence their commitment to children.

Keywords: investment model, commitment to children, comparison level for alternatives, structure equation model, fathers